

小 論 文

次の文章を読み、あとの問に答えなさい。

私たちが幸せを感じられないのは極端な能力主義や効率重視の社会のためだと考える人がいます。つねに評価に晒^{さら}され、首尾よくやるにしてもどれだけ効率よくできるかが問われる。

これは人工知能（AI）脅威論の背景にもなっていました。自分たちよりはるかに優れた能力をもつ AI が（実態はよく分からないが）自分たちの仕事を奪うのでは、という危機感が AI = 敵というイメージをつくり上げたのだ、と。いまではあまり聞かれなくなりましたが、シンギュラリティー（技術的特異点）という言葉で人が漠然と感じていたのも能力主義に由来する恐怖だったのかもしれません。

その一方で、私たちは機械になりたがっていると考える人もいます。この場合の機械とは、外から指示を受けてその通りに動くことで成果をあげるもの、というくらいの意味です。

自分で価値を判断せず、いやそもそも特定の価値観など持たず、手続きの正誤だけを行為や判断の基準とし、自分が生きる意味さえ外部に与えてもらう（そんなこと求めないのが機械のほうですが）、その姿を機械になぞらえているようです。この場合の外部とは、市場の評価やユーザーの声といった各種データのようなものです。なぜそうなるかといえば、失敗できないからです。背後には、やはり能力主義や効率化があるのでしょう。

そこから次のような考えが出てくるのもよく分かります。人が AI = 優れた機械をあれほど恐れたのは、人が AI に比べて能力の劣る機械だから（人の知能も AI もよく分からないのに比較してどうするのかという指摘はひとまずおくとして）。とすれば、人がこの比較の背後にある能力主義や効率化の恐怖から解放されれば、AI 時代にも幸せになれるのではないか。

人は何かができるから素晴らしいのではなく、できないことがあるからこそ、その人にしかない個性が生まれるのであり、またできないことがあるからこそ人はお互いの力を必要とする人もいます。AI が得意なことは AI にやらせて、人は人にしかできないこと、例えば手間隙^{てまひま}がかかること、効率とは程遠い、無駄に見えることを楽しめばよい、それができれば敵としての AI は消えるのだ、と。

たしかに、そうかもしれません。けれども、数年前に大きな衝撃とともに強い反発を引き起こした生成 AI は、あっという間に学校や職場で活用されるようになりました。以前ほど AI = 脅威という抵抗感はなく、AI は私たちの生活にすっかり馴染^{なじ}んでいるようにも見えます。

実際、ネット検索、ゲーム、クルマの運転等で、それと気づかず AI のお世話になっている人、また友達や同僚のように AI と対話しながら遊んだり仕事をしたりしている人も増えていることでしょう。AI は便利な道具であり、AI が自分たちよりもある点で能力的に優れているおかげで、これまでできなかったことが比較的簡単にできるようになり、さらに効率的に動けるようになった。そこでは圧倒的な能力差がむしろ歓迎されているかのようです。

では、私たちはすでに、AI の時代に心の幸せを感じられる方法を手に入れたのでしょうか。もう少し考えてみたいと思います。

（「AI 時代の心の幸せ」秋庭史典 中日新聞 2025 年 5 月 25 日 9 頁）

問 無駄に見えることが、創造性や人間関係の豊かさにつながるのはなぜだと思いますか。あなたの考えを 800 字以上 1000 字以内で述べなさい。